新木場漫歩

東京都東京ヘリポート

「木のまち　新木場」とその周辺エリアで気になる会社、企業、人物、スポットを紹介する新木場漫歩のコーナー。今回は「東京都東京ヘリポート」です。

地図を見て新木場の埋立地南端に、東京ヘリポートがあることは知っていました。普段は行く機会のないところ。でも興味はありました。「気になる」スポットです。「新木場漫歩」の取材のお願いをしたところ、東京都東京港管理事務所港務課ヘリポート係の前澤寛主事が取材日程の手はずを整えて下さいました。

東京ヘリポートは新木場4丁目にあります。新木場3丁目と4丁目の間を通り、若洲橋へ至る道は、今年二月東京ゲートブリッジが開通し、めっきり交通量が増えました。若洲橋の手前で「東京ヘリポート前」の標示。正門で用件を伝え、許可を得て車を入れました。

平成23年5月に完成した現在の新庁舎

ヘリコプターの任務・活動を支える
東京の、もう一つの空の公共ターミナル

開港から40周年を迎えた国内最大の公共ヘリポート

迎えて下さったのは、東京都東京港管理事務所港務課の西山庄一ヘリポート係長と、前澤寛主事のお二人です。東京ヘリポートは現在、東京都の施設として都が管理運営を行っています。西山係長がヘリポートの歴史をかいつまんで教えて下さいました。

昭和39年、辰巳ヘリポート（旧東京ヘリポート）が供用を開始。その後、ヘリコプターの離発着数が増えるにしたがい、5ヘクタールの敷地では手狭になったため、昭和47年6月15日に新木場埋立地（現在の新木場4丁目）に東京ヘリポートが開港しました。現在の敷地は14・7ヘクタール、辰巳ヘリポートの約3倍の広さです。この地が新木場4丁目として江東区に編入されたのは昭和55年のことです。今年は東京ヘリポートの開港から40周年になります。

平成21年に国土交通省東京航空局江東空港出張所と気象庁東京航空地方気象台東京ヘリポート出張所の撤退に伴い、これまで国で行っていた航空保安業務の提供（情報提供業務及び気象観測業務）を東京都へ移管され現在に至っています。

現在、東京ヘリポートには、警視庁航空隊や東京消防庁などの官庁、報道機関や航空会社などの民間会社等、合せて24の機関、会社が基地を置いています。離発着数は、多い年で年間2万3千回（平成22年実績）を数えます。ヘリポート内では各基地に所属する整備士、給油会社の関係者など約900人弱の人が働き、制限区域内立入許可証（ランプパス）が発行されています。

「管制室」ではなく「対空通信室」

――最上階の管制室を見学させていただけますか？

西山係長が笑いながら教えて下さいました。「『管制室』ではありません。『対空通信室』と呼んでいます。ここで行っているのは、離発着の許可や指示を与える管制業務ではなく、情報提供業務です。自己責任の有視界飛行でヘリコプターを操縦するパイロットに、対空通信室は周辺で飛行中の航空機の状況、滑走路の離発着状況、気象状況など

空から見た東京ヘリポート周辺とその様子
（写真提供：東京都港湾局）

昭和46年11月。江東区新木場で東京ヘリポートの整備工事が開始された頃の空撮写真。
（写真提供：東京都港湾局）

を集約して情報提供を行い、安全運航を支援するのが対空通信室の役目です」。

最上階の対空通信室に案内していただきました。全方向が大開口のガラス窓で、通信室は想像以上に視界が明るく、エプロンの向こうに東京湾が青々と広がり、湾内にヨットが何艘も浮かんでいます。風をはらんだ白い帆が目に鮮やかです。

通信室では松本隆さん、河原田健治さんのお二人が職務中でした。お二人は一般財団法人航空機安全運航支援センター江東事務所の職員で、松本さんは江東事務所長です。同支援センターは、かつて航空機の管制業務等をしていた職員ＯＢで構成され、全国18箇所の空港で飛行場情報提供業務等を受託しています。気象情報の提供は一般財団法人日本気象協会が受託しています。

河原田さんがパイロットと交信しています。英語で内容はよく聞き取れません。「話しているのは、もっぱら風の情報です。ヘリコプターは風を正面から受けて離着陸しますから、風向きを数字で正確に伝えます」。スピーカから聞こえてくるパイロットの声は女性です。「近年は女性パイロットが多くなりましたね。もうすぐ1機着陸します」。河原田さんが北東の方向を指差しました。黒い小さな点が次第に大きくなり、青色の機体がヘリポートに近づいてきました。通信していた声の主は警視庁航空隊の女性パイロットでした。

また1機、今度は西側からヘリコプターが接近してきました。豊洲の高層マンションのある方向です。

大震災の救援基地として
―届いた感謝状

――3・11東日本大震災のときはヘリコプターがずいぶん活躍しました。離発着が混雑することはないんですか？松本さんにお聞きしました。

「ありますが、管制業務ではないので待機を指示したりすることはありません。離発着は基本的に順番どおりですが、待ち時間の無駄を出来るだけなくすように心がけています。ヘリポートの情報圏内は半径3マイルの円内ですが、東京ヘリポートは羽田空港の空域とも一部重なっているので飛行高度など空域が制限されています。近年は、西側に３００フィート前後の高層建築が密集し始めたので、騒音にも特別配慮しなければなりません」。

「3・11では、九州、西日本など日本全国から被災地に向かって救援ヘリコプターが飛びました。東京ヘリポートも緊急救援物資の輸送などにヘリコプターが何度となく離発着を繰り返しました。近くには浦安に燃料補給基地があるのですが震災で浦安の施設が機能しなくなったため、東京ヘリポートは全国から飛来するヘリコプターの中継給油基地としても離発着機数が増えて、約1ヵ月半は忙しかったですね。

騒音対策として東京ヘリポートは運用時間を基本的に午前8時半から午後4時半、日没から午後8時半までの帰還機、夜間遊覧などは1日10回を限度としています。しかし、3・11では災害対応の緊急事態でしたから、このときは夜間も飛んでいました。

騒音で苦情が出るかもしれないと気を揉んでいましたが、感謝のお手紙を事務所宛てにいただきました。今までになかったことです。ヘリコプターの活動の公益性を理解していただけたことは良かったと思います」。

防災拠点への整備

救急患者の搬送、救助、救急用資機材の輸送。山岳地などへの建設物資輸送、薬剤散布、報道取材など、ヘリコプターの機動性は幅広い分野で活用されています。東京ヘリポートは、これらヘリコプターの任務・活動を支える、国内最大の公共ヘリポートとして、全国の公共ヘリポート離発着数のおよそ2分の1を担っています。

――3・11震災の時は、新木場一帯は液状化被害で一部機能マヒとなりましたが、ヘリポートには影響はありませんでしたか？西山係長にお聞きしました。

「幸い液状化などの被害はありませんでした。しかし、震災の経験を教訓に、3年計画でエプロンの地盤改良工事を始めています。このヘリポートは、災害発生時『緊急輸送ネットワーク』の航空輸送基地として指定されています。防災拠点としての機能を確保し、より安全に利用できるようにするための工事で、平成25年度に完了する予定です。ヘリコプターの運航を支援するヘリポート管理者の責務です」。

――ヘリポートの外観を撮りたいんですけど、どこかベストポジションはありませんか？

「それなら、対空通信室から、正面に夢の島緑地公園の遊歩道が見えるでしょう？あの真ん中のベンチが定番の撮影ポイントですよ。ここを見に来る人はそんなにいないんですが、ここの役割をもっと伝える努力ももっとしなくてはいけませんね」。西山係長はそう言いながら見送って下さいました。

みなさん、ありがとうございました。

若く気さくな前澤主事

やさしい語り口の西山係長

前澤主事から構内図でヘリポート施設の概要を教えていただきました

3.11震災時の様子を語る松本さん

一息ついて、くつろぐ河原田さん。

対空通信室でパイロットと交信する河原田さん

対空通信室で。ヘリポートの空域制限について教えていただきました。真ん中が松本さん。右が河原田さん。

着陸態勢の警視庁航空隊の「おおとり」

昭和47年6月15日。東京ヘリポートが運用開始。運輸省（現国土交通省）東京航空局江東空港出張所（写真左手前）と東京都東京ヘリポート管理事務所（写真右奥）（写真提供：東京都港湾局）

《後記》

東京ヘリポートが、新木場埋立地の供用開始と歴史を同じくし、今年40年目を迎える、新木場でも最も古株の施設であったことを初めて知りました。ヘリコプターはさまざまなシーンで活躍していますが、ヘリポートはその華々しい舞台裏を支えています。取材中、ヘリポートの役割をもっと広く周知したいですねと言ったら、前澤寛ヘリポート係主事が、事業広報のパンフレットと、ＷＥＢサイトを刷新する案を作成中であることを教えて下さいました。

後日、前澤主事から、東京ヘリポートの事業と歴史を紹介するホームページを新たにしたので、ぜひ「木と合板」誌上でも紹介して下さいとのお電話とメールをいただきました。ＵＲＬは下記のとおり。

読者の皆さん、ぜひアクセスしてみて下さい。新木場のもう一つの顔が見えてきます。

（博物館スタッフ　長谷川麻紀）

東京都東京ヘリポートHP
http://www.kouwan.metro.tokyo.jp/jigyo/tmg_heliport/index.html